ニュースレター「イデア」

idea

2019.10

NPO・地域・企業・行政の情報発信により、「アイデア」と「であい」の機会を創ります。

1｜二言三言｜　TREE SUPPORT 木助　佐々木恭平さん
3｜団体紹介｜　南小梨黄金山農業協同組合
5｜地域紹介｜　上町自治会（東山）
7｜企業紹介｜　株式会社 一般公害集配センター（一関）
8｜博識杜のフクロウ博士｜　協働の領域
9｜センターの自由研究｜　伝説調査ファイルNo. 3「河童伝説」

今月の表紙

大東町曽慶地区にある「かっぱ井戸橋」の親柱（橋の名前が書いてある板のつけられた柱のこと）は、伝説の生き物「河童」が模られています。河童がモチーフとなっているだけでも謎なのに、「井戸」とはさらに謎！「かっぱ井戸」の真相は9ページ「センターの自由研究」にてご覧ください♪

idea ニュースレターイデア

発行　いちのせき市民活動センター　〒021-0881 一関市大町4-29 なのはなプラザ4F Tel 0191-26-6400 Fax 0191-26-6415　ホームページ:https://www.center-i.org/　メール:center-i@tempo.ocn.ne.jp
せんまやサテライト　〒029-0803 一関市千厩町千厩字町149 Tel 0191-48-3735 Fax 0191-48-3736

おしらせ

講座　まちづくりコーディネーター養成講座

第4回目は「事業の考え方」をテーマに“行うこと”が目的となってしまいがちな事業が“本当に必要なのか”事業の考え方を学びます。第5回目は「事務局のおしごと」をテーマに、自分が団体の事務局になったと想定し、事務局の役割や会計事務などについて学びます。

日時:【第4回】2019年10月26日
【第5回】2019年11月9日
※各回土曜9時30分～開催
場所:なのはなプラザ 4階会議室
参加料:2，000円（全5回分）
主催:いちのせき市民活動センター
問合＆申込:0191-26-6400
※要申し込み

イベント　第9回 かやぶき祭り

一関市内に古くからあるかやぶき民家の保存・継承につなげようと2011年から年に1度開催しています。今年は、五島列島に移築されたかやぶき民家の紹介やもちの振舞い、雅楽公演などを行います。かやぶき民家でゆったりとした時を過ごしましょう。

日時:2019年10月13日（日）
9時～15時
場所:岩手県指定有形文化財
村上家（千厩町小梨字不動65）
参加料:無料
主催:かやぶき民家を残す会
問合:0191-24-4401（村上）

イベント　せんまや本町 アートフェスティバル ～ソラニンの味～

千厩町本町の空き地・空き店舗などを活用したアートイベント「せんまや本町アートフェスティバル」。一関ゆかりのアーティストを中心に様々なジャンルのアート作品を本町の各所で楽しむことができます。同時開催イベントなど、詳細はFacebookからご覧いただけます。

日時:2019年10月12・13・14日
10時～16時（最終日は15時まで）
場所:一関市千厩町　本町商店街
入場料:無料
主催:せんまや本町通り振興会
問合:0191-52-2606
（伊庄整体ヒーリング）

講座　集落参観日

地域の抱える課題解決や活動のマンネリ化脱却などを目指し、地域外の視点を取り入れたいという集落と、市内のローカルな魅力に興味のある人、他地域の事例を知りたいという人などをマッチングする企画「集落参観日」。今年度は大東町猿沢の「峠自治会」を参観します。参加者を10月17日（木）まで募集しています。

日時:2019年10月27日(日)9時～14時
場所:大東町猿沢「峠自治会」地内
参加料:1,000円(ランチ交流会費用込)
主催:いちのせき市民活動センター
問合＆申込:0191-26-6400
※要申し込み

講座　自治会長サミット vol.9

自治会運営に携わるご本人から皆さんへ、生の声で“自治会運営のコツ”をご紹介いただきます。今回は、人口・世帯数が多いため民区を2つに分区した山目五民区さん（一関）、住民が楽しく生き生きと暮らすために様々なアイディアにチャレンジする岩ノ下自治会さん（東山）の取り組みを発表いただきます。

日時:2019年10月10日（木）
13時30分～16時30分
場所:川崎市民センター
対象:市内自治会長又は準ずる役員の方
参加料:無料
主催:いちのせき市民活動センター
問合＆申込:0191-26-6400

講座　森とキノコの学習会

秋といえばキノコ！花泉町老松の山でキノコたちを探し、見つけたキノコを観察しよう。はずみの里副理事長・調査部部長の阿部慶元さんをガイドに、森の中で働くキノコについて学び、最後は皆で美味しいキノコ汁を食べます。

日時:2019年10月20日（日）
12時30分～15時(12時20分までに集合)
場所:はずみの里 ※老松小学校向かい
（一関市花泉町老松字藤田231-8）
参加料:200円
定員:15名
対象:小学校児童、一般
申込締切:2019年10月15日（火）
主催:NPO法人里山自然学校はずみの里
問合＆申込:0191-82-3857

まちの写真展

スタッフがまちの１コマを切り取ります。

作品名「百閒堤(ひゃっけんつつみ)が守るもの」

平成12年度東磐井地域棚田20選に選ばれた室根町津谷川の「有切棚田」。この棚田の水源は平成21年度に全国ため池百選（農林水産省）に選ばれた「百閒堤（有切ため池）」が守っています。堤防に立ち、前後に広がる広大な眺めをぜひともお楽しみください。

Q＆A

みなさんの「知りたい」にスタッフが応えます。

認可地縁団体とは何ですか？

自治会のように、「その区域に住所を有する者の地縁に基づいて形成された団体」で「その区域内に住所を有する人は誰でも構成員となれる団体」のうち、一定の手続きを行い、法人格の認可を受けた団体を言います。法人格を取得することで、団体名義での不動産登記ができるようになります。

136 / 115,937

佐々木 恭平

青森県黒石市生まれ。平成25年、結婚を機に一関市へ。妻の実家である牧場業（養老馬預託）を継ぎ、普段は牧場作業に従事しながら、平成30年頃から依頼があればツリークライミングの技術を用いた支障木等の剪定、伐採作業に応じています。

第64回　TREE SUPPORT 木助　佐々木恭平さん × いちのせき市民活動センター センター長　小野寺浩樹

「支障木」を「シンボルツリー」へ
～庭木・敷地木管理のお手伝い～

観賞用としてのみならず、家や敷地への防風機能や境界機能としても植えられ、持ち主や庭師等によって管理されてきた庭木・敷地木。ライフスタイルの変化やそれに伴う価値観の変容、高齢者世帯の増加なども重なり、管理のできなくなった庭木への困りごとを抱える人も増えているように感じます。そのような「身近な樹木の困りごと」相談に対応をしている佐々木恭平さんにお話しを伺いました。

小野寺　そもそも何がきっかけでツリークライミングの技術を取得したんですか。

佐々木　青森時代に働いていた観光施設で、新たな観光コンテンツとしてツリークライミングを検討していて、お試しで講座に参加したんです。あくまでもアクティビティとしてのツリークライミングで、楽しいとは思いましたけど趣味として手を出すには道具代がかかりすぎるし、その時はそれで終わっていました。一関に来て牧場内の木を使って何かできないかと考えていた時に、たまたま「日本空糸㈱（以下、空糸）※」さんと出会い、初めてツリークライミングが本来は樹木を管理するための技術だったことを知りました。

※一関市萩荘に事務所を構え、ロープアクセスの技術で各種調査・点検等を請け負う

小野寺　単なる「遊び」だと思っていたものに「仕事」としての役割があったんですね。

佐々木　はい。それで改めて興味を持ち直し、まずは牧場内の木にロープで登り（＝ツリークライミングの技術）枯れ枝等の剪定練習を始めました。いざやってみるとイメージ通りにいかないことも多いのですが、それを次の課題として練習を続けるうちにどんどんのめり込んでいって。

小野寺　それが「木助」に発展したきっかけは何だったんですか。

佐々木　空糸さんが北上展勝地で請け負った特殊伐採の現場に誘ってくれて。その時にこの技術による樹木管理の需要と有効性を実感したんです。

小野寺　実際、どのような需要が多いですか。

佐々木　これまでにあった依頼では屋根にかかった枝の処理が多いです。それまでは家主でも管理できていたものが、木が大きくなりすぎて、自力では管理しきれず、かつ高所作業車が入れないような場所の作業依頼ですかね。それから、同様の場所で桜の天狗巣病も多いです。

小野寺　確かに、そういうケースの時にどこに頼んだら良いか分からず放置してしまう人も多いでしょうからね。

佐々木　昔は庭師のほか「空師」と呼ばれる職人さんがいたのですが、地域からそうした職人さんがいなくなりつつあります。「お願いしていた庭師さんが他界してしまって困っていた」という相談も多いです。

小野寺　「木助」は庭師でも空師でもないんですよね？

佐々木　どちらかというと空師に近いですが、目指しているのはアーボリストの技術を使ったスタイルです。アーボリストは日本ではまだあまり知られていませんが、高い木でも安全に、かつ自然な樹形を守るような管理をする人たちで、欧米では普及しています。単純に伐採ではなく、木を生かす、ケアをすることに重きを置いています。木が好きというのが大前提ですね。

小野寺　つまりツリークライミングの技術だけではなく、樹木に関する知識がないとできないということですよね。

佐々木　はい。樹木に関する知識は正直に言うと猛勉強している最中です（笑）たまたま義母が造園業者で植物にも詳しいので、アドバイスをもらいながら活動しています。

小野寺　最近では改めて手入れをするより、管理ができないがために、完全に伐採してしまおうと考える人も多い気がします。

佐々木　そうですね。特に昔は活躍していたはずの「いぐね」が、手入れをしないことで日が入らない暗い空間を作り出してしまったり、屋根に落ちた杉の葉が腐れの原因になったりと、厄介者のような存在になってしまっています。それが、枝打ちをしたことで光が入るようになったり、落ち葉の数も減り、再び敷地木としての存在価値が高まるだけではなく、土地の活用そのものを見直すきっかけになることもあって。

小野寺　地域に入ると、電線にかかりそうな支障木をどうしようという話題もよく聞きますが、木助でも対応可能ですか？

佐々木　もちろん可能ですが、作業箇所が電線の真上や処理した木が電線に当たる可能性がある状態の場合、電線を保護するカバーの設置を専門業者に依頼しなければならず、それだけで15万近くかかってしまいます。なので、できるだけそうなる前に手入れをすることが大切です。

小野寺　なるほど。街路樹なども管理が大変と聞きますが。

佐々木　個人的には一関の街路樹はもっと本来の樹形に近づけてあげて欲しいと思っています。今は道路や歩行者、近隣住民とのトラブルを避けて、のびのびと成長させてもらえていない状態に見えます。仙台のような大きな都市でも街路樹と共存し、むしろ街路樹を光のページェント等のように活用しているわけですから、一関でもできると思うのですが。

小野寺　市内には同じような技術で活動している人もいるんですか？

佐々木　ほとんどいないと思います。日本でも増えてはいますが、まだほんの一握りなので、こういう技術があるということを広めて、もっと市内にもシンボルツリーを増やしたいです。管理されずにほったらかしにされていた木や、天狗巣病などの病気によって「見たくない木」になってしまっていたような木が、手入れをしたことによって、逆にシンボルツリーのような存在になっていけば嬉しいな、と。

小野寺　産業構造の変化により、昔はあったけど今は廃業している仕事が庭師や空師と同様にあります。それが社会の隙間を深め、課題化していると思っているので、木助のような隙間を埋める取り組みがより一層必要だと感じました。

佐々木　隙間を埋める存在になっていけるよう、牧場業の傍らでなかなか参加できずにいる講習会等にも参加して技術を高めたいですし、あとはとにかく現場をこなすことかと思うので、お気軽にお声がけいただければ嬉しいです。

TREE SUPPORT 木助
住所　一関市中里字大平山23-76
電話　080-1841-1800

団体紹介

守り続けたいおらほのシンボル・黄金山

南小梨黄金山農業協同組合

南小梨黄金山農業協同組合
南小梨のシンボル「黄金山」の植林や環境整備のほか、山に親しんでもらうための交流事業も積極的に行っています。

〒029-0802　一関市千厩町小梨字浦沢121
TEL　0191-52-3812（組合長：千田）

左の写真：役員のみなさん（「一杯清水」の前にて）

地域の暮らしを支えてきた山

千厩、室根、藤沢にまたがり、奥州藤原氏の栄華を支えた金の産出地として知られる黄金山。千厩町の最南端に位置する南小梨地区では、明治以前から昭和20年頃まで、黄金山を馬や牛の餌、堆肥にする草や焚き木を採るための入会山（共同の山）としてきました。

その後、太平洋戦争から帰ってきた地域の若者たちは黄金山に南小梨の将来展望を求め、昭和24年に南小梨入会山農業協同組合を設立。草木を刈るだけではもったいないと杉や松、檜等の植林活動を行い、現在では所有する約１００町歩の８割程が植林され、緑豊かな山となっています。

昭和60年に南小梨黄金山共同組合に名称変更し、前身の活動も含めて今年で70周年を迎える同会には、南小梨に暮らす人の約９割が加入。「環境整備等の活動には皆出てきて来てくれるのが自慢。義理堅い人ばかりだから、手当が出る活動より奉仕活動の方が参加するね」と笑顔を見せるのは組合長の千田雅勝さんと企画担当理事の尾形香さん。近年は山の環境保全のほか、交流事業などにも取り組む同組合の活動についてお話を伺いました。

知って、触れて、みんなの里山に

昭和59年に南小梨子供会育成会協議会による手作りキャンプ場が作られ（その後、町道整備のため千厩町によりキャンプ場を新設）、東京都世田谷区との交流事業「ＰＡＬＰＡＬ交流」の拠点となった黄金山。「自由に自然や動植物とふれあうことができるキャンプ場で都会の子ども達もふっとんで遊んだね」と尾形さんは当時を振り返ります。

たくさんの人が黄金山を訪れるきっかけをつくったＰＡＬＰＡＬ交流は平成30年３月で33年の歴史に幕を閉じました。同組合では「賑わっていたキャンプ場も交流事業がなくなったことで使う人がいなくなれば、いずれは南小梨のシンボルの山もなくなってしまうのではないか」と危惧し、「地主である我々が子どもたちを呼び、賑わいを取り戻そう」と、同年から市の地域おこし事業に申請し「里山づくりプロジェクト」に取り組んでいます。

平成30年度は山の日に「黄金山キャンプフェスタ」を開催。木工教室や丸太切り体験で子ども達に木や山を身近に感じてもらったほか、里山コンサートでは「千厩ワルツ」などで知られるグループサウンズ「Ｊａｃｋ５（ジャックファイブ）」がこの日のために約50年ぶりに復活するなど、老若男女が黄金山に集いました。

今年度は一関市の元気な地域づくり事業と連携し、里山プロジェクトの一環として子ども達と留学生のキャンプ事業にも協力。以前、豪雪被害で折れてしまった黄金山の桜の木を使った箸づくりは留学生にも喜ばれました。他にも年度内には森林観察や木に登って間伐する枝打ち体験なども予定されており、自分が暮らす地域の山の環境がどうなっているのか、どのように管理されているのか知ってもらい、興味を持ってもらえるような企画を準備しています。

まずは山に遊びにきて

昔から「宝の山」とも呼ばれている黄金山は、金や木だけでなく、きれいな湧き水が出ることでも知られています。山頂への登山道の入り口から湧き出る名水「一杯清水」は尾形さんが一杯清水を守る会を立ち上げ、環境整備に取り組み、震災時には貴重な水源としてたくさんの人が訪れたそうです。

最近では毎月、黄金山キャンプ場の近くにある藤沢の保呂羽神社で開かれている神社の清掃活動「グッドモーニング神社ｗｉｔｈ珈琲」で淹れるコーヒーにも一杯清水を届けているそうで帰りに黄金山に寄っていく人もいたり、藤沢の人達が黄金山を登る際に尾形さんがガイド役に呼ばれたりと山を共有する他地域との交流も広がってきました。藤沢の人とは「そのうち草刈した後に山頂で一緒に焼肉でもしようか」なんて話もしているんだとか。

「個人で山を管理する人は減っているし、自分の山がどこなのかもわからなくなってしまうかもしれない。林業での収入は難しい時代だが、緑を残すために山の手入れはしなくてはならない。そのためにも、まずは大人にも子どもにも山に足を運んでもらいたい」と語る千田さん。同組合では黄金山を登ってみたい時のガイドも随時受付中とのこと。豊かな緑ときれいな水、山の空気に触れてみてはいかがでしょうか。

あなたにとって「黄金山」とは？

組合長

ちだまさかつ
千田雅勝さん
30年以上活動を支える４代目組合長。「植林した木が立派に育ったので今後はどう活用するかが課題」とのこと。

企画担当理事

おがたかおる
尾形香さん
一杯清水の保全、PRにも取り組む他、「日本自然保護協会」登録の自然観察指導員として黄金山のガイド役としても活躍中。

- Photo gallery -

里山コンサート
Ｊａｃｋ５の復活コンサートの他、民謡歌手・佐藤信子さんによる「みちのく・黄金山春秋」も披露されました。

森林観察
木の名前クイズなどを楽しみながら山頂を目指します。山頂からの絶景はぜひ自分の足と目で確かめてみてください！

マイ箸づくり
黄金山の木を使った箸づくりは特に留学生に好評で「友達の分も作っていく」とたくさん作っていった人もいたんだとか。

木工教室
東磐地区技能士会の協力・指導で、木箱づくりにチャレンジしました。「黄金山キャンプ場」の焼き印を押して完成！

地域紹介

「協力」の精神で活力ある地域へ

上町自治会

総務部、体育文化部、防犯部、福祉衛生部という４部会で構成。県道19号線が横断し、東と北は猨鼻渓から続く砂鉄川が境となるこの地域には96世帯256人が暮らしています。

左の写真：夏の恒例行事盆踊り納涼祭での抽選会の様子

東山 上町自治会

東山における中心街の一角を担う

行政区でいうと東山町の長坂２区にあたる上町自治会。エリア内には以前本誌の企業紹介にも登場いただいた「げいび観光センター」「かぢや別館らまっころ山猫宿」「パティスリーフジ」「永盛堂」「東磐交通」など、地域貢献に一役買っている様々な企業が事業所・店舗を構えているほか、東山市民センター・東山図書館も擁しており、長坂、そして東山町における中心街の一角を担っている地域といえます。

一方で自治会エリアは決して広域ではなく、むしろかなりコンパクトにまとまっており、アパートなどの集合住宅がないこともあり、長坂地区の中心部の中では世帯数・人口ともに決して多いとは言えません。

今回はそんな上町自治会で７期13年目の会長生活を過ごしているベテラン自治会長、千葉亮吉さんにお話を伺いました。

環境整備と交流促進に力点を置いた事業

事業では春秋の清掃以外に環境整備の数が比較的多いことが特徴です。県から受託している砂鉄川堤防の草刈りを年３回行うほか、観光地猨鼻渓の入り口に立地していることから、「猨鼻渓に来てくれたお客様をできるだけ綺麗な環境で迎えたい」という思いもあり、バイパス（県道19号線）や上ノ橋児童公園（猨鼻渓から歩いてすぐ、東山市民センター向かい）を中心に草取りやレーキ掛けを年４回実施しています。堤防と上ノ橋児童公園では花壇の花植えも行っており、観光客や住民の目を楽しませています。

一方、交流促進を主な目的とする事業の中でも、盆踊り納涼祭では、誰でも踊れる炭坑節を中心とした踊りはもちろん、焼き鳥やかき氷、ビールなどを提供する屋台を出したり、抽選会を実施するなど、賑わいを見せます。

それぞれ年１回開催しているグラウンドゴルフ大会、パークゴルフ大会も、開催時期を行政区対抗の各大会の前に持ってきて予選会の趣も醸し出す工夫をしつつ、住民の交流と健康増進に繋げています。千葉さん自身も「良い運動になる」として、喜寿（77歳）を迎えた現在も汗を流しているのだとか。

こうした事業も含め自治会運営についてはいくつかの工夫が見られます。例えば新年交賀会は、自治会の総会と同日（１月第３日曜日）開催することで、事業開催の負担軽減と参加率向上という相乗効果が生まれています。

また、様々な理由で班の世帯数には差が出るものですが、班長の負担という視点で不公平感をなくそうと、思い切って班の再編成に着手。その結果、現在10班体制中少ないところで７世帯、多くても10世帯と、居住エリアに配慮しながらもバランスがとれた編成になり、不公平感はほぼ払拭されています。

ベテラン自治会長はかく語りき

13年目を迎えベテランの域に達した千葉さんの目は、地域の現状をどのように捉えているのでしょうか。

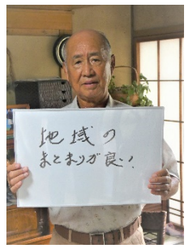
「自治会活動の参加者の中には一部若い方もいるし、草取りなど奉仕活動に家族みんなで出てきてくれる世帯もあり感謝している。活動への理解者も多い地域だと思う。一方で、参加するのはいつも同じ人というケースも多く、自分には関係ないと考える人との二極化になっている。今後は世代交代も考えつつ、特に若い世代の自治会活動への参加を促進する工夫が必要」「後継者問題。自治会長をなかなか辞められず13年経ったが、適任者がいないわけではない。かと言って働いている方には頼みにくく、定年延長などで退職年齢が遅くなると地域デビューも遅くなり、結果的に役員の高齢化や自治会長の後継者問題にも繋がる。人口減少社会のひずみは自治会活動にも影響を及ぼしている」千葉さんはこのように現状分析しています。

子供の頃寄せ書きに書いた二文字の言葉

自治会長になる前は総務部長を４年務めた千葉さん。しかし自治会長になったことで「より地域の人たちとの交流や親睦が深まった」と語り、喜びでもあると語ります。そんな千葉さんが小学生の頃に何かの寄せ書きで書いたという「協力」の二文字こそ、今自治会に求められる金言なのかもしれません。

Q.集落の自慢は何ですか？

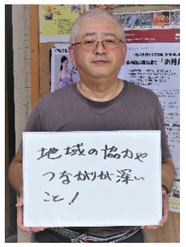
自治会長



ちばりょうきち
千葉亮吉さん

総務部長を２期務めた後、白羽の矢が立ち今日に至るまで自治会長として多忙な日々を過ごす。就寝前のひと時が至福の時間。

監事



おいかわしんいち
及川晋一さん

役員の中では50代と若手。急なお願いにも快く応じていただきました。前沢東山線沿いの長坂商店街に店を構える「こめや 及川商店」の代表。

- Photo gallery -

盆踊り納涼祭

毎年８月15日に上ノ橋児童公園で開催。近隣自治会からも人が集まる一大イベント。櫓の上では本番前の太鼓の音チェック？

電器店を集会所に

電器店だった空き店舗を集会所として借用。防災倉庫の役割も備えており、会議や住民のサークル活動に使われています。

砂鉄川を彩る花壇

猨鼻渓から市民センターに続く通りには住民が整地・花植えした花壇があり、行き交う人々の目を楽しませています。

長坂商店街（東）

長坂商店街のおよそ東半分が上町自治会エリア。本文で紹介したお店もいくつか見えていますが探せますか？

企業紹介

一関　株式会社 一般公害集配センター

昭和52年７月創業。鮮魚店を営んでいた先代（現代表取締役の父）の「魚のアラは廃棄ではなく、肥料にする」という考えから、「限りある様々な資源を大切にし、地球環境や資源の保護をしよう」と、一般廃棄物、産業廃棄物等収集運搬（一関市委託）・リサイクル回収（古紙、鉄、非鉄、ビン類、プラスチック類等）・産業廃棄物中間処理業（溶融・破砕・再生）など、一関市（昭和57年２月～）や岩手県（平成元年２月～）・宮城県（平成15年7月～）の認可を得て業務を拡張してきました。平成22年に狩野勝彦さんが二代目代表取締役として運営を引き継ぎ、事業体制を見直し、地域社会に根付くための人材教育（意識改革）に力を入れています。

黄色のパッカー車※が地域の安心安全も見守ります

※塵芥車（じんかいしゃ）（ゴミ収集車）

限りある資源や美しい自然を次世代へ

「私たちの使っているものの多くは木や石油などから出来ています。地球の資源には限りがあるもの。年、紙の原料として、あるいは木材や燃料として木が切り出され、森林がなくなっているのが現状です。毎たちが生活の不要物として出すごみの中には、資源としてもう一度使えるものがたくさんあり、そのために私は資源廃棄物を分別して出すことが大切なのです」と語るのは、代表取締役の狩野勝彦さんです。「今でこそ、ゴミステーションが地区内に多く数設置され、燃えるゴミと燃えないゴミの区分けがされていますが、そのういった機能がなかった時代は不法投棄も多くありました」と続けます。

学生時代から家業の手伝いとして通学途中にゴミステーションチェックをしていたという狩野さんは、高校卒業後、産業廃棄物処理業について多くの知識を得るため、盛岡市内の同業種企業に就職し、企業の運営そのものについても学んできました。

平成22年、思いがけず早々に地元に呼び寄せられた狩野さんは、急逝した先代の跡を継ぎ、代表取締役に就任。前職で学んだノウハウを基に「企業理念に基づく運営」と「従業員が安心して仕事ができる体制づくり」を徹底し、従業員の仕事に対する意識改革に努めます。

「もともとは家族経営から始まった企業なので、以前は公私混同する部分や、『ごみを扱う』ということから、なり手不足や業界の古い体質による従事意識のズレもあった」と当時を振り返り、「５人程度から始まった企業でしたが、今ではお陰様で36人の従業員と共に『限りある資源や美しい自然を次世代に残していくために私たちのできることを日々全力で取り組もう』を合言葉とし、地域の皆様に理解していただきながら展開しています」と続けます。

子どもから高齢者まで「見守り」にも一役

同社では、県内でもいち早くゴミ収集車にドライブレコーダーを取り付け、それを活かすべく「こども１０番の車」の巡廻窓口として、平成28年６月、一関警察署と活動に関する覚書を結びました。これは一関警察署管内初の試みで、「地域の安全に関する活動を推進し、犯罪の未然防止と早期解決の一役を担い、安全で安心して暮らせる地域社会の実現を目指す」ことを目的としており、子ども達や女性が危険に遭遇した時の具体的な保護方法や、不審者（不明者）発見時の対応・連絡の流れについて同署生活安全課の担当者を招き研修も行いました。また、同年11月には、一関市と協定を結び、「高齢者見守りネットワーク事業」の協力事業者として、関係機関（警察及び消防など）と連携し、ひとり暮らし高齢者などの見守りサポートも行っています。最後に「当社では、子どもからお年寄りまで幅広い方々を見守り、地域の防犯活動などに今後も努めていきたいと思います」と語っていただきました。

1 代表取締役社長　狩野勝彦さん「設置場所を提供していただければ、無償でゴミステーションをおつくりいたします」

2 年数回開催する環境美化活動。黄色旗が目印です。

3 黄色のパッカー車。今日も市内をパトロール。

DATA

〒021-0102
一関市萩荘字上本郷149-7
TEL 0191-38-2355/ FAX 0191-38-2356

毎月さまざまなテーマで地域づくりについて考えていくコラムです。

今月のテーマ

協働の領域

第７話

一体感の醸成と地域ごとの特色

２年間の議論で創り上げた「**一関市協働推進アクションプラン**（以下プラン）」は、一関市総合計画を上位計画とし、基本計画で定める**「市民と行政との協働によるまちづくりの推進」の実行計画**とするものです。このプランで目指すまちの姿は、総合計画に示されている将来像「人と人、地域と地域　が結び合い　未来輝く　いちのせき」を実現するため、市民と行政とが相互に協力連携し、未来に向かって発展していくよう、次の３点としています。

①市民一人ひとりがお互いを尊重し、主体的に活動できる住みよいまち　（個人の尊重と主体的活動）
②地域に住む人たちの絆を深め、みんなが幸せを感じられるまち　（結い、連携、コミュニティ）
③地域の文化や歴史を踏まえ、地域の良さを活かしたまち（地域らしさ）

プラン策定時の論点の一つに**「一体感の醸成」**と**「地域の特色」**がありました。
合併したからこそ、**新市としての一体感を求める声**と、合併して広域になったからこそ、**合併前の地域の特色を活かすべきという声**。一進一退の議論が続いた訳ですが、**「一体感の醸成」では、行政サービスの統一と向上**を目指すこととし、**「地域の特色」に関しては地域ごとによって背景や課題が異なる**ので、平たくするのではなく、**地域づくりにおいてそれぞれの個性を発揮できるような取り組み**にすることを目指しています。それが今日に至る**地域づくり計画を基本とした地域づくり**です。

「協働」の領域

「協働」のまちづくりと言いますが、地域づくりすべてにおいて「協働」するのではなく、**協働という「手法」を上手に活用する**ことが大切です。

協働による効果を期待する領域として、地域づくりの三要素である**「自助・共助・公助」**が挙げられます。この三要素を例に**「協働の領域」**について考えてみます。

自助 【個人・家庭】	共助 【集落・地域・市民団体・企業】			公助 【行政（市・県・国）】
住民一人ひとりが豊かな生活を送るために努力すること	近隣の人々、または市民が豊かな地域づくりに協力すること			法律や制度に基づき、行政機関などが提供するサービス
市民の 責任と主体性によって **独自に**行う領域	**市民が** 市民組織、 企業の**協力によって**行う領域	**市民組織、企業と行政が** **それぞれの主体性** のもとに協力して 行う領域	市民組織、 企業の協力を 得ながら **行政の主体性**の もとに行う領域	**行政**の 責任と主体性によって **独自に**行う領域

これまで地域は**「結」**で支えてきました。しかし、時代の変化（生活サイクルの変化）とともに**ニーズが多様化**し、**「結」だけでは支えきれなくなってきている**のです。地域の集まりの参加率が低いこと、地域の役のなり手不足が代表例として挙げられるでしょう。

また、少子高齢化により、**単一集落での地域運営も難しく**なってきています。近隣集落から選手の貸し借りをして参加する地区民運動会が代表例として挙げられます。今から数十年前の人が多かった時代では、このようなことは少なかったはずです。

行政も地域と同じように、市全体を支えようとしても、支えきれなくなってきているのです。行政は**公平・平等の原則**により、何か行おうとすれば、広く多くの人の了解が必要で、地域から何か課題解決の提案がされても、様々な対応ができません。そこに職員減、財政難も相まって、**地域のニーズに応えきれない**状況です。

協働の領域は、**市民と市民、市民と行政**が**相互に協力しあう部分**、すなわち**共助の部分**であり、**共助に「協働」という「手法」を用いて成果を引き出していく**ことが目的で、**何でも協働すればいいということでもありません**。一関市の場合は、協働の定義が**“話し合い”**なので、**共助の部分に話し合いと言う手法を掛け合わせ、「考えてから行動する」**と言い換えることができます。

センターの自由研究

ミッション38 伝説調査ファイルNo.3 「河童伝説」

「河童伝説」と言えば遠野市が有名ですが、実は当市にも河童伝説があり、さらにはその伝説にちなんだキャラクターまでもが誕生していたことをご存知でしょうか？今回は地域づくり活動を盛り上げる大役を担わされたかっぱのキャラクター「そげっぱ」誕生の由縁となった「曽慶川かっぱ伝説」の真相を現地調査してきました！

「かっぱ」が地域を盛り上げる!?

今回の河童伝説の舞台は一関市大東町曽慶地区。平成27年5月に発足した地域協働体「結いネットそげい」では、曽慶地区をPRすべく、子どもからお年寄りまでが親しみをもてる地域のマスコットキャラクターの作成に取り掛かりました。

同会内の「曽慶PRチーム」が主体となって検討を続けてきた結果、キャラクターを地域住民に公募することに。18点の応募の中から選ばれたのが、地域に伝わる河童伝説に由来した「河童」のキャラクターでした。

また、キャラクターの愛称には19点の応募があり、「そげい」と「かっぱ」を掛け合わせた「そげっぱ」に決定。木彫りの「そげっぱ」が製作されると、協働体が復活させた「そげいの夏祭り」にてそのお披露目が行われ、さっそく地域内を盛り上げました。

現在、同会フェイスブックの顔となり、曽慶地域のPRに欠かせない存在となっている「そげっぱ」とは、はたしてどのような伝説から誕生したのでしょうか。

曽慶地区の
ＰＲキャラクター
「そげっぱ」
◆誕生日：
６月２０日(ふたご座)
※年齢不詳
◆性別：男の子

曽慶川かっぱ伝説

曽慶住民の故小山秀夫さんが、婿に入った先のおばあさんから聞いた話を文章として残したものです。
※原文のまま記載

むかしむかし、この曽慶川上(大石平)と下(川口)に二組のかっぱ連中がたむろしており、「俺達は一番偉くて強いのだ」と、双方ともに信じ込み威張っていたんだと。

なにもたいした違いはないかっぱのことだから、両手足とも指はそれぞれ3本づつで頭にはハシッコのあたりに若干のふさふさ毛のあるお皿をつけていたが、ただ1つの違いは大石平組は背中当てを着て、川口組は腹当てみたいなのを着用してたと。

ある年、さっぱり雨の降らない日が続いたと。なにせ、頭のお皿が干からびてしまえば終わり、生きていけないかっぱの定めなんだと。

これぁ大変だと思案しているところへ、誰かがこの川の中ほどに「滝」というところがあって真平らな畳石が敷き詰められてあり、そこには、どんな干ばつでも干からびることなく清水がこんこんと湧き出る井戸があると言う。

それを聞いた連中、なにせ命に関わることだからそれ行けとばかりに滝の畳石を目指して大忙し。大急行したらどうだ同じ噂を聞いたのか、大石平組も川口組を同着だったと。

で、どっちが先にこの井戸の水を飲むか、まだ今のジャンケンを知らない連中だから、それではお互いから代表を出して先方の頭のお皿を落としたほうから飲むこととしたと。

そしたらどうしても大石平組の勝ち。川口組は残念でくやしいし、頭のお皿の水もますます干からびてくる。

一計を案じて先に引いたその線はあまりにも大石平組に有利だから、少し斜めに引き直せとなったそうだ。人のいい大石平組も可哀そうになって現在の線に引き直したんだと。

それからは、双方とも五分五分でお水も公平に飲み、これからは毎満月の晩にこの滝畳石に集まり、お皿落としのお遊び等をして仲良しとなり、それぞれ楽しくお家に帰ったと。

▲「かっぱ井戸」とも呼ばれる「滝畳石」。伝説に基づき、付近に相撲土俵を作ったり、川魚を放流したり、地域の子ども達に喜んでもらうような仕掛けをたくさん行ってきました。

曽慶市民センター

※地図に記載なし

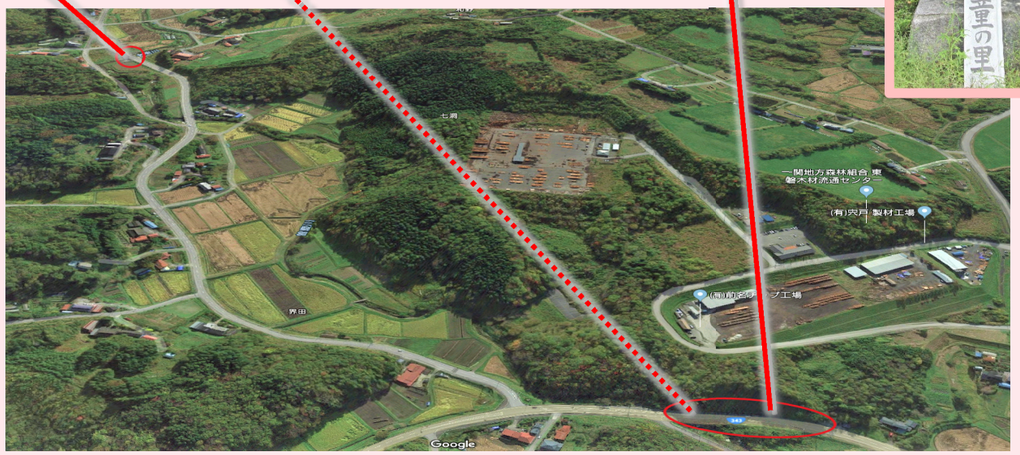
曽慶市民センターの玄関で住民たちをお迎えする木彫りの「そげっぱ」。季節ごとに衣裳を変え、地域に笑顔と話題を振りまきます。

カッパ桜橋エリア

平成26年またしても曽慶に新しい橋が完成し(曽慶７区地内)命名の機会を与えられました。「ここで地域のみなさんと河童伝説を語り合いながら、賑やかに交流ができるように」との願いで橋のたもとに桜を植え、「カッパ桜橋」が誕生しました。

かっぱ井戸橋 エリア

平成10年、国道343号線の開通に伴い、曽慶川に橋を架けることに。橋の名称を土地所有者ら が検討できることになり「子ども達が少なくなり、集落に活気がなくなってきた」という地域の現状から「昔話を語り継ぎ少しでも盛り上げよう」と「かっぱ井戸橋」と命名。



橋の付近には「曽慶川かっぱ伝説」の案内板設置や有志が作った休憩スペース(ベンチ)、河童モニュメントも設置されているほか、誰が設置したのかは謎だという立体「そげっぱ」が鎮座しているとかいないとか…!?

「曽慶はキビが日本一だから、キビ団子を作ってみんなでここで食べたんだよ」

by良治カッパ

曽慶地区 かっぱスポット探訪

今はなき曽慶小学校の子ども達に授業の一環で曽慶河童伝説をガイドしたこともあるという岩渕良治さん(曽慶在住/81歳)にご案内いただきました！

※衣装はその時のもの